

マルセル・プルースト 「失われた時」から「見出された時」へ
——『スワン家の方へ』に見る——

Ⅲ. コンブレのイメージ世界 1. コンブレの町で (1)

上 西 妙 子

Résumé

Proust : du "temps perdu" au "temps retrouvé"

—Dans *Du Côté de chez Swann*—

III. L'univers imaginaire de Combray

1. A Combray (1)

Taeko Uenishi

Vivre à Combray constitue pour le héros à découvrir, sans savoir, sa façon d'être au monde: ce qu'il y vit s'inscrit dans "des gisements profonds de [mon] sol mental". Combray devient ainsi le monde où la vie intellectuelle et la vie matérielle sont unies et par là même le lieu communicant avec ce que le héros peut vivre et éprouver.

"Habiter à Combray, c'était un peu triste". Le héros ainsi se décrit, tout au début du récit, désœuvré le soir, dans la situation de remplir le vide pour trouver la raison pour laquelle il est là et le moyen d'en sortir. Les seuls prolongements matériels à cet état de désœuvrement sont une lanterne magique et la lecture que vient lui faire sa mère. Ces deux éléments apprennent au héros la façon à suivre le dramatique: le premier avec son expression accentuée qui fait de lui le prototype du lieu où le drame de la sensation et le temps qui passe peuvent être condensés: et le deuxième, avec ses tons, ses accents, et son rythme, se métamorphose en une sorte de vie autonome qui engendre ses propres associations d'idées.

L'ingénuité du héros – écrivain émerge dans cette façon de vivre en drame; parfois en étant proche et parfois en s'en écartant; ces deux procédés combinés en alternance, telle est la technique narrative quand il parle de la lanterne magique. S'y plonger et s'en enivrer est sa façon de vivre avec bonheur des odeurs remplissant la chambre de sa tante.

はじめに

回想に浮かび上がるコンブレの町、それはパリに住む話者が、少年の日に春や夏を過ごした町である。ところでこの小説中の町は、プルーストの父親、パリ大学の衛生学の教授であったアドリヤン・プルーストの出身地であるイリエ (Illiers) をモデルとしており、この町は現在では、その正式の名称をイリエ＝コンブレとする。物語中の「スワン家の方」の舞台を示唆した実際のイリエの野には、「イリエーマルセル・プルーストのコンブレ」と書いた道標も設けられている。地図にイリエを探す時、またパリからイリエに向う時、目印として、そして通過点としてあるのが、パリの南西 95 km に位置するシャルトルである。昔、イリエは、シャルトルをその重要な巡礼地の一つとするサン・ジャック・ド・コンポステルへの巡礼路¹⁾にあたっていたという。この町を、麦畑の遥か向こうに見定めて近付いて行く時、招くように刻々その姿を詳細にしていくのがシャルトル大聖堂である。物語中で描かれるコンブレのサン・チレール教会の鐘塔は、まさに、このシャルトルに向う時の旅行者のものといえる。ただしそこには、教会の姿の親密さが荘厳さに取って代ってはいらぬ。けれども、完結した美と幸いの空間にこうして辿りつき得る思いを与えることにおいて、この両者は対等である。

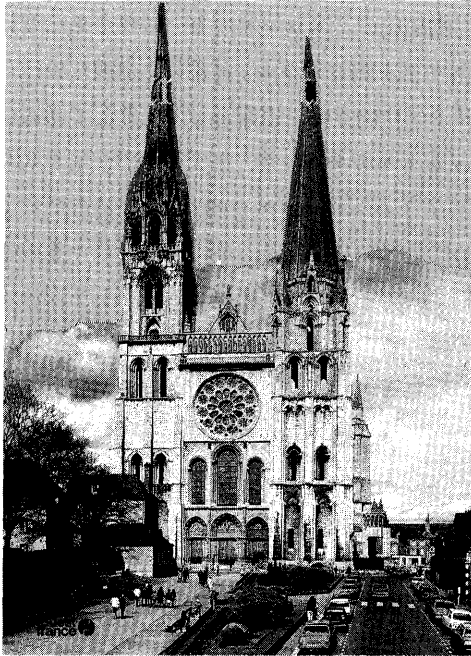
毎年、復活祭まえの聖週間にやってくる途中、十里離れて、汽車から眺めると、コンブレの町はただ一つの教会堂としか見えなかった。その教会堂は町を要約し、代表して、遠方にまで、町のために、町のことを吹聴しているのである (...)
(p. 49)

そこでは一つの世界が、地から身を起こして、自らを意識する分だけ空に向って背を伸ばしている。風の冷たさにも春が感じられる復活祭の週間にあって、柔らかな木々の葉の新鮮さに追いついて立てられるように、大地にあって、鐘塔は空の雲に向きあっている。

サン・チレールの鐘塔、コンブレがまだ見えてこない地平線に、あの忘れられない姿を刻み付けている鐘塔は、ずっと遠くからそれとわかるのだった。復活祭の週間、パリから私たちをはこんできた列車の窓から、この鐘塔がその頂きの小さな鉄の雄鶏をくるくるまわしながら、空にたなびく雲の敵をつぎつぎと滑ってゆくを見かけると、父は私たちに言うのだった、「さあ、膝掛をおしまい、着いたよ。」(p. 43)

フランスで最も美しい聖堂といわれるシャルトル大聖堂は、ロマネスクとゴシック様式の混合である。たとえば、正面入り口とその上の三つの窓は12世紀のロマネスクであり、切妻屋根やバラ窓は13世紀のゴシック、そして向って右の塔はロマネスク、左はゴシックである。そこに巡礼者が見出すのは、「シャルトル・ブルー」と呼ばれるステンド・グラスの深い青色に染め

られて、人びとの思いに時を超えて応えてきた大聖堂の高く深い空間であり、そして、尊崇の思いが、石に、鋳物に、また木片に結晶して成った様々の形である。ロダンは言っている。「この大聖堂の中で、いつも私を心の底から感動させるものは、この大聖堂が私に喚起する英知に対する感覚である」²⁾。この聖堂を満たすのが英知の荘厳な静まりだとなると、私たちはコンブレの生活に、英知が日常において持ちうる、ひた向きの安逸の賑わいを見ていくだろう。



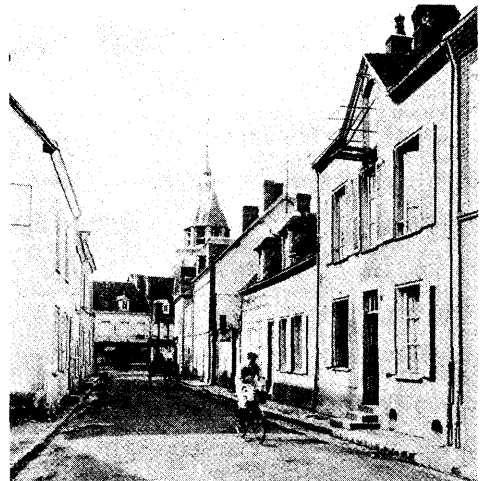
そして、この大聖堂の空間において、私たちは眺め入って息を呑むことを知るだろう。心に発する手の技は、そんなにも丹念な鋭さを見せている。その思いをロダンはこう語る。「私はこれまでに、人間の天分の大きさをこれほどはっきり感じたことはない。私自身が賛嘆の奔流にまきこまれながら大きくなるのを感じずる」。それは、「大聖堂全体は、構成要素の一つ一つが、他のすべての要素に大きな反響を与えるような調和の術で組み立てられている」ことにあるのだろう。そこから、次のような言葉が綴られる。「例えば、控え壁（煉瓦壁、または石壁などを安定させるために、壁から突出し柱状をなす壁体の一部）は対立の美である。ずんぐりした壁と、すらりとした削形（くりかた 一部材を削って曲面にした部分で、装飾要素）。高い頂上の花飾りと、入口に集まっている者たちのざわめきとの心地よい効果を助けるために、可能な場所には、どこにも休息がある」³⁾。この空間は、人間の心と応じあう能力を持っているようだ。広い堂内を、場を移しながら眺め、そして距離を取って再び向いあい、あたりの空気に浸り、響く音を聞き取ろうとして動き回るあいだ中、私たちは常に、高く囚われた一つの地上の美の場にいる。応えあう「斉一の律動」、それがコンブレにおいてブルーセントが描く世界であることを、私たちは見ることになるだろう。

ローマ時代には、この聖堂のある場所にはフランスの先住民族であるセルトの神殿があったという。そこに最初のキリスト教会が建てられたのは4世紀であるが、その後5回にわたる火災のあと、12世紀初めに建てられたものが、現在、地下礼拝堂と正面部分に残り、いま見られる他の部分は、1194年の災害後の建築になる。だから、人びとの心と手を促して何度も作りなおされたこの空間には、時そのものの層が閉じ込められていると言えるだろう。ロマネスクの抑制ある優雅が、ゴシックの激しい華麗さと一つになって、永遠を思った人びとの情熱の動きそのままを、この空間に伝えている。規模を小さくしながらもそれと同質の空間を、私たちは、コンブレのサン・チレール教会に見ることになるだろう。

そしてこの町を出る時には、私たちの心はもう高い空に、何か力を得たかのように、十分応えなくなっている。そこからイリュ＝コンブレへの道は、思い切りよく広がる野を進んで行く。それは、分け入り探し求める楽しさを与える道ではなく、むしろ拡がりの野放図さに飲み込まれて行くばかりの道である。しかし、到達すべき町は＜プルスートのコンブレ＞なのだから、私たちは、どうしても息を詰めるようにして、茂みにも流れにも眼をこらしてしまう。シャルトルの町から南へさらに6km。ボース平野になだらかに広がる畑と野の渦に巻き込まれたようなイリュ＝コンブレの町は、空にむかって静かに小さく広がっている。町中には、生活することの日々の親密さが、空中に逃げ去ることなく、広場に、通りに、流れの畔に低く漂っている。



レオニー叔母の家



コンブレの町とサン・チレール教会

さて、こうしてコンブレに辿りついた私たちは、話者が回想するコンブレの物語に耳を傾けようとするのだが、いったい回想は、どこを起点として、どこに向かって進むのだろうか。「コンブレ」と題される第一部（I, 9—187）は、おおざっぱに言って3部分に分けることが出来る。まず町中の家と人びとが描かれる（I, 9—133）。この部分をいくつかのテーマにおいて見るこ

とが、本小論の目的である。だが、このコンブレの町は、その背景として二つの方向への拡がりを持っており、その三者が一つとなる構造によって、はじめて「コンブレ」となる。その意味を少し考えてみなければならない。

その二つの方向とは、同じ日にその両方に行くことは出来ない二つの散歩道である。すなわち、まず、「リラや、さんざしや、矢車草や、ひなげしや、りんごの木を持ち」(I, 184),「野原には、私にとってコンブレに特有の精霊であった風が、ちょうど眼に見えない風来坊のように絶えずわたりすぎていた」⁴⁾ スワン家の方へ向うメゼグリーズの道(I, 134—165)である。早く出掛けることもなく、天気でなくてもよかったこの散歩道に続くのが、天気をたしかめて出掛けねばならなかった、「おたまじゃくしの川や、睡蓮や、きんぼうげ」⁵⁾ が咲き、川の流れをさか上って道を奥深く辿るゲルマント家の方への道(I, 165—186)である。ただし、幼年の日々の懐かしさが繰り返されていく時の、あの切れ目のない流れに添うように、ここで語られる独立した挿話のそれぞれは、互いに誘いあい、また魅惑しあって連関している。たとえば、「マリアの月」と呼ばれる五月の毎土曜日に、教会の聖母の祭壇に飾られるさんざしの花は、その「白衣の乙女の媚を含んだまなざし」⁶⁾ で、話者をスワン家の方の野へ、そして少女達へと誘うことになる。一方では、スワン家の方の野で聞いた少女ジルベルトの名、そして土地の代々の領主であるゲルマント家の名が話者を誘っていくのは、ゲルマント侯爵夫妻が住むヴィヴォーヌ川の水源へと至る道であり、「その源は私にとって、はなはだ抽象的な、いわばアイデアのようであった」⁷⁾ ゲルマントの方という具合である。発展を支えあう重層性を、コンブレでの経験の全体に見ることができると言える。それは、とりもなおさず、「経験」の全てが「発見」(I, 183)であるということではないだろうか。

この発見の連鎖である「コンブレ」を生きた後には、話者は、その地について、次のように語ることができる。「メゼグリーズの方やゲルマントの方は、異なったさまざまな印象を、みんな同時に感じさせていたという理由だけから、それらの印象をけって消えないほどに強く私のなかに結合してしまった」と。しかも「その両方の道を歩き回っていたころに、私がそうした物や人を信じ切っていた」ので、そこから話者は、将来にわたって、一方では期待はずれの失望を招いたり、多くの誤りを重ねさえもしたと言う。その失望や誤りとは、例えば、「単にその人が私にさんざしの生垣を思い出させるだけだというのに、見境もなくその人に会いたがったり、旅行したいという単なる欲望だけから、愛情が戻ったと自分で思い、相手にもそう思わせようとしたこと」⁸⁾ である。

けれども、迷いと魅惑は同じ心の働きによるものといえる。それらは共に、「精神の土壌の深い地層」⁹⁾ での動きとしてあるものだから。そこにあっては、全ての心の動きは「他の印象におけるよりもひとつだけ多くの次元を与え」¹⁰⁾ られるようになる。その次元とは、感受の様々が相互に響きあい、「時」を介してメタファーの生成につながる次元といえるだろう。コンブレの町から辿る二方向への道、スワンとゲルマントの道は、かくして、話者にとっての「精神の土壌の深い地層」となり、それらにつながる印象に、「土台や深さを与え」とともに、「魅力と、意味とを、ただ私だけのためのある意味」¹¹⁾ とをつけ加える。だから、

夏の夕方、おだやかな空が野獣のようにほえて、ひとびとが雷雨をうらむ時、降りしきる雨の音を通して、目に見えないかなたに、いまだに残っているリラの匂いを吸って、ただ一人、恍惚としていられるのは、メゼグリーズのほうのおかげなのだ。(p. 122, I, 186)

コンブレの地とは、響きあう意味連関を持つ世界、つまり、一般に「風味」と呼ばれるものがコンブレでは「香り」(I, 186) と呼ばれるように、それは転換を生かす世界、それゆえに「世界」という語に対して、抵抗しがたく話者の心が生の成就を求めて傾斜する土地の原型と言える。しかも、交わることがないと見えたゲルマントとメゼグリーズの二方向は、『失われた時を求めて』の最終巻に至って、実際は互いに湾曲して隣接しあっていることが分かる¹²⁾。それゆえ、「コンブレ世界」とは、異質世界の合一をも可能とする世界であると同時に、意味を生み出し、またそこを振り返って意味を求めることを可能とする亀裂を内包する世界でもある。スワンとゲルマントの二方向に支えられて成立するコンブレに発する生は、話者に内的な時空の特定を求めるが、その合成の経過が持つ間接性ゆえに、それは、新しい経験の受容へと自らを開いていける生でもある。そして「リラの匂い」に覚える恍惚とは、コンブレで育まれた類似を喜ぶ心である。「類似に喜びを見出す」という、本質的に技巧が関与する行為の基礎として、まず、「味わいつくす」ことのごく初歩的なあり方の形のいくつかを見るのが、本小論の目的となる。

二

話者は、そのコンブレの地で生きた「時」の端緒を、次の時刻に始まったとする。すなわち、不眠の夜に発するコンブレの回想は、次の文章で始まる。

A Combray, tous les jours, dès la fin de l'après-midi, longtemps avant le moment où il faudrait me mettre au lit et rester, sans dormir, loin de ma mère, ma chambre à coucher redevenait le point fixe et douloureux de mes préoccupations. (I, 9)

コンブレでは、母や祖母から離れてねむらずにじっとしていなければならない寝室のことが、毎日のように、日暮から寝にゆく時間までの長い間、私の不安の悩ましい中心になるのだった。(p. 8)

冒頭の「A Combray コンブレでは…」の表現は、明確な場の指示である。しかもそれが常のこと (tous les jours) とされている。この書き出しから、一日の始まりをもって語りは始めると読者は期待してもいい筈だ。ところが続く表現は、話者の回想の「時」が、一日の終りから (dès la fin de la journée...) 始まることを告げる。そこに語られていくのは、「待つこと」の不安、暗やみと孤独、そして充たすべき空虚を前にして身構え続けなければならない長い時

間 (longtemps avant...) ののだ。「そうした夕方のあまりにもみじめな様子を見かねた家のひとたちは、私の気をまぎらすために、幻燈を映すというまいことを考えだして、夕食の時間を待つ間、それを私のランプに仕掛けてくれた。」(p. 8) このようにコンブレの日々は、まず、満たすべき夕刻の空虚な時として提示される。

彩色された光は、日常の外観を覆い隠して「不透明な壁を、微塵の虹彩と色さまざまの超自然の幻にかえてしまい」、瞬時に別の世界を現出させる。それは言い換えれば、眼が、ひいては外部を感受する意識が行ない得る作用の、最も極端な効果である。つまり、外部世界に投影された、想像力による操作の成果に等しいと言えるだろう。「コンブレ」を標題としながら、そこに描かれるのは、腑観的にとらえた町の在り方でも生活の記録でもない事を、私たちはこの書き出しから了解することになる。問題となるのは、思い出すべき「コンブレ」を生きた話者が、思い出されるべき「コンブレ」となるように自らの内部に捉えるべく、どのようにそれを意味ある内容にしていったかを、描くことなのだ。描かれるべきは、世界の見え方に応じて、外部にあるドラマが自らの内に取り込まれていく仕方なのだ。そうすると、「コンブレ」の冒頭に語られるこの幻燈を、少年の話者がどのように見るのかを考えることが、「コンブレ」論の初めにくるはずだ。

夕食前の慰めであった幻燈がすみ、そして夕食がすむと、天気の良い日には、大人達は客人とともに、しばしの時を庭で過ごす。話者は一人、二階の寝室へと上がっていかなければならない。この簡単な説明から、もう既に多くのことを語ることが出来る。庭、外気、家人それぞれの好み、父親、祖母、親しさの慣れと感情の鈍磨、来客、隣人、そして了解としての他人についての知識。これらは、生活を育てる場でもあれば、また束縛ともなる「家族」そのものである。それらは、就寝時に至る時刻に向って漠とした不安を受け取めている少年にとっては、荒々しい断定の形式と映るものである。だから、合一の安らぎのために、彼は母親を独占しようとする。それは、一人で寝床に就くべき時に、傍らに母親にいてもらうことである。しかし、その願いは、この家族においては許されないことだった。その要求を、両親に対する反抗だと自覚しながらも意地をとおす時の戦慄、勝ちとろうと願いつつ、一方で、禁忌を侵したゆえに受けるべき追放と破滅を知る意識。この夜、ついに話者は、「母の意志をゆるめ、理性を曲げさせることに成功」¹³⁾ し、彼の部屋にとどまった母親に本を読んでもらう。だが、夢見た完全な甘美さは、もう壊れているのだ。

ところで、これらの家庭内状況であり賜であるものとは、同時に、囚われた少年の条件でもある。コンブレ想起の幕開けから直ちに続く9—43頁にあるのは、このように状況内にある人間が迎える、夜の物理的な闇であり、また外部の闇としてもある他者との間の暗さの予感である。世界の闇、他者との間にある闇に、幻燈の光と同じように場を切り開くために投げ出されるのは、言葉である。ここで私たちは、「コンブレの町」を語り解いていくもう一つの基本視点として、「幻燈」に続いて「読書」をあげることができる。読書の素材としての語の連なりが、眼前の世界を完全に遮断して読む人に対して別の世界を構築するのではなく、その精神内で、外界との相互豊穡作用をいかに可能としていくかを、私たちはブルーストから学ぶことが出来

るだろう。

そこで展開される読書論は、コンブレの日常生活内での「読書の時」の意味、「書物の世界」と「外界」の相互作用、そして「その読書の時に可能となる精神の世界」を論じるものだが、それに先立って、ここで、母親がこうして寝床の話者に聞かせる朗読が持つ効果を考え、話者にとっての「経験」の基層とは何かを見てみたい。

お母さんは私の寝台のそばにすわった。もってきたのは、『フランソワ・ル・シャンピ (捨て子フランソワ)』だったが、その赤みがかった表紙と意味のわからない表題は、この本に際立った個性と神秘的魅力とを与えているように思われた。
(p. 29—30)

単一色の平明さを持たない「赤みがかった」色、その曖昧さがもたらす不定の意味合い、そして固有名詞が持つ特性として、決して徹底した理解を与えないまま際限なく推量を促すという事実、この両者が相俟って、この夜の経験は、「本」から感じ得る多くの力を語っている。それは単に、よく解りきらないままに、思いを遠く馳せるように耳を傾けるという、ごく単純なことでしかないのだが、私たちが育み、もはや消し去ることが出来なくなる夢見る心の傾きとは、このような日々の経験に発しているのではないだろうか。しかも当時、話者は本を読む時に他のことを夢見る癖があったために、放心が話に隙を作るのに加えて、母親が恋愛場面をすっかりとばすので、「水車小屋の少女と少年とのそれぞれの態度に生まれてくる奇妙な変化は、すべて深い神秘の跡を残しているような気がした」¹⁴⁾ と言う。そして、そのよく解らない原因が、「シャンピ」という、初めて聞く、耳にいかにも優しい、その未知の名の中にあるのだと想像する。

ここに見られるのは、情動的な要素を自らが付け加えながら、物語性の流れに巻き込まれようとする話者の積極的な姿勢である。そしてそれは、物語のヒーロー、ヒロインを私たちが捉える典型的なやり方でもある。名前の音を中心に、こうしてその思いは繰り返しの中で強化されていく。

なぜそんな名がついているのかしらないけれども、その名は鮮明な、緋色の魅惑的な色を放って、その少年を包んでいるように思われた。(p. 30)

色彩を伴う思い、それは読書がもたらす魅惑の経験が完成する一瞬の内容だろう。このように動いた心が忘れることをせず、そして言葉によっては直接に思い出しはしない「経験」、それこそが、失われた時の中に探し求めるべき「時」である。

母親の朗読から、話者は本の内容ではなく、動きの色調そのものとしての読書の質を、次のように聞き取る。

語そのものにはあらわれていない作者の内心の抑揚、それを母は身うちに感じ

て、ついにその文を、その文に必要な調べにのせて誘導するのだった。そうした調べのおかげで、読んでゆく途中、動詞の時制のどんな生硬さをもやわらげ、半過去や定過去には慈愛のなかにあるなごやかさ、愛情のなかにある憂愁の色をそえ、終わろうとする文を始まろうとする文のほうに向けてゆき、音節の進度を、早めたりゆるめたりして、音節の長短の異なるにもかかわらず、それらを斉一な律動のなかに入れ、こういうありふれた散文に、情緒纏綿として一種の生命を吹き込むのだった。(p.30)

問題とされているのは、単なる音読の技術ではない。基礎には、作者の内心の抑揚を朗読によって再生することが意図されている。こうして聞き手が感受しえたのは、上記の文の下線部の語群全体が指し示すもの、つまり、「過ぎ去っていくばかりだが、たしかにその時を生きたと言える時」の質、抑揚、調べ、色、つまりは「時の生命」なのだ。便宜上の方策としての文法事項は、こうして、その根本的な不備を補われていく。過去形にはそれに相応しい「遠さの色合」が加えられ、呼吸に乗って再生された言葉に相応しく、言葉を発する愛情は持続する。意味ある語の連なりにするべく強引に組み合わせられて出来あがった文章は、こうして母親によって、「一種の生命」を得て、表現の自律を生きることになる。

ここに生まれる「斉一な律動」の中にある世界とは、ロダンが語ったシャルトルの聖堂に見られるものだ。そのリズムが持続させる物語内に自らを投入することができれば、聖堂の生命も、そして「コンブレ」世界の生命も、再び生きなおすことができるだろう。母親がその朗読から話者に教えた努力とは、単なる物語の筋を追うことではなかった。むしろ、それは表現の流れに添うことのできる心の空間を用意することであったが、その努力とは、まさに、夕暮にある存在の寂寥感と空虚を、自らで満たしていく時に私たちが持つべき、一種の生命感と言えるだろう。

三

自律する生命感を得ること。その方策への示唆を、一方、コンブレの町の中心に位置する「教会」からも学ぶことが出来る。教会は、直線に上る鐘塔を持ち、高く響く鐘によって告げるべき「時」をもって町を統括し、それによって人びとに、内部からの照応を問いかける存在である。この意味で、教会がそれ自体できっかけとしての変容の現在を常に示すものだとすると、時間と知恵を費やして変容の妙を日々の場で見せるのが、調理場、台所だろう。コンブレにはフランソワーズという、生活の達人である女中さんがいる。彼女の日常をめぐる描写は、とくに複合性 (multiplicité) の文体効果を多く含んでいる。フランソワーズの台所が教会に続くテーマとすると、さらにもう一つの論点は、コンブレ回想に向う契機となった主題でもある「部屋」であろう。コンブレの「部屋」は、完結した一つの世界を作っている。そして、コンブレ世界での全てのドラマの根にあって、その展開の姿を示すものとして、「マドレーヌ菓子」の挿話がある。私たちはコンブレを、次の順で語っていく。

- 1) 幻燈の世界, 色彩 (I, 9—10)
- 2) レオニー叔母の部屋, 満ちた空間, 匂い (I, 49—50)
- 3) 茶碗の中の自然のドラマ (I, 50—51)
- 4) マドレーヌ菓子, 茶碗から繰りだすドラマの原型, 味覚 (I, 44—48)
- 5) 台所の魔術, 変容と統合の魔術師フランソワーズ
- 6) 規範としての教会の姿, 時を越えるその仕掛け (I, 59—67)
- 7) 読書論 (I, 83—88)

1) 幻燈の世界

不眠の夜にあっての「部屋」の回想に続いて、ただちに語り始められたコンブレでの思い出は、夕食を待つ時刻に、話者を楽しませた幻燈であった。幻燈に写しだされる誇張された表現というのは、「感覚と時間経過が、性急に、そこにおいて一致するべきドラマなるもの」の原型とも言えるだろう。投影され像を結ぶ光とは、状況に組み込まれる時に、人間が持つ世界感受の内容と言い換えられる。自分自身でその構成に与った物語に引きずりこまれる話者は、その時、習慣の麻痺作用から逃れ出て、単純であるゆえになおさら緊密に連関する場に身を置いて対応する経験を持つことができる。彩色された光が壁の凹凸を走る。その下で、室内は単なる表面と化し、投影される光の厚みに押さえこまれてしまう。

するとその幻燈は、ゴシック時代の一流の棟梁や焼絵ガラスの巨匠にならって、不透明な壁を、微塵の虹彩と色さまざまの超自然の幻にかえてしまい、あたかもちらちら揺れて瞬時にうつろう焼絵ガラスでも見ているように、そこにいろんな伝説が描き出された。(p. 8)

ところで、ここに現出する世界は、「すっかり自我で満ちし切り、自分自身に対すると同じようにあまり注意を払わなくなっている部屋の中」への「神秘と美の侵入」であり、それゆえに、話者は言いようもなくいやな気分になるのだが、その気分はさらに悲しみへと進んでいく。

だが私の悲しみは増すばかりだった。なぜなら、そんな照明の変化だけでも、私の部屋の習慣はこわされたから。寝るという苦しみを除けば、この習慣のおかげで、私はもう部屋のことなど気にしなくなっていたからである。それなのにいまはもう、(...) 自分の部屋で私は不安になるのだった。

習慣が壊される時、習慣の外に追い出される時、人はなぜそこに自身が存在し、なぜ世界がそこにあるのかについて、自身の力で物語連関を見出すばかりでなく、それを機能させもしなければならぬ。そこで出来上がっていく物語は、やがて自身の器である習慣となり、年月を経た後は、過去の「時」そのものと一致する思い出ともなっていくだろう。

話者は「この習慣のおかげで、私はもう部屋のことを気にしなくなっていたから」と言うの

だが、「気にも留めることなく生きてきた」という、誰にでもあるこのごくありふれた思いを、根源に立ち戻って検証することが、物語『失われた時を求めて』の最も素朴な動機と言えるだろう。「生活」とは、この慣れの優しさと恐ろしさを按配して続けられ、「気にも留めなくなる」程の中和を得るようになる。幻燈に映しだされる人物群の物語は、だから、その柔軟な従順さにおいて、私たちの「生活」を基底から考え直させる。壁面に動く人物群は、あてがわれ、今は慣れた動作を、繰り返し真剣にやっけてのける。

馬を急がせ、胸に一物あるゴロが、丘の斜面を暗緑色のびろうど地に染めなした
三角形の小さな森から現れ出て、躍り上がりながら、あわれなジュヌヴィエヴ
・ド・ブラバン¹⁵⁾の城の方へ進んでいく。(p. 9)

彼らの物語は、直截、明快である。そして、この叙述の面白さは、スライド上の距離を、物語の、そしてそこに含まれた意味の距離そのものとしてしまっている滑稽さである。その簡潔の美が持つ快を、私たちが生活の中で持つことは殆どない。全くないともいえる。そういう訳で、私たちは当然ながらこの物語に対して醒めているのだから、作家ブルーストとしては、読者の冷静を念を入れて確認させるほうにこそ、平常に行なわれている「生活」認識の慣れを揺さ振ることができるのだ。そこで、次の文が来る。

その城は一つの曲線で断ち切られているが、その曲線というのは、ほかでもない、
幻燈の溝にすべりこませる枠にとりつけた、楕円形のガラスの原板の縁なのであ
る。つまり城の一翼だけが見えているので、その前には野原があり、そこに青い
ベルトをしたジュヌヴィエヴが物思いに沈んでいる。

下線部の指示語は、物語連関の虚の緊密さを支えている。しかし、このやり方で確認がこのまま進んでは醒めきってしまう。そこで、眼で物語の進行を確かめている話者に、思い入れの高まりがあいかわらずあるのだとして、その一方で、私たち読者は放り出されてしまう。こうして、物語性への埋没の倍加された主導権は、揺らぐことなく話者が握り、醒めさせられた読者は、虚構の枠組を見つめることになる。

城と野原とは黄色なのだが、それは見るまでもなく何色だか私にはわかってい
た、というのは、原板を枠にとりつけるまえから、ブラバンという名の金茶色の
ひびきがはっきり私にその色を教えたから。

子供が同じ「お話」を何度聞いても楽しむのは、朗読の刺激としての内容と、それに対する自身の反応の動きを、少数の構成単位ゆえになおさら、慣れた予測の喜びも加わって連続した運動そのものとして飽きることなく楽しむことが出来るからだろう。

ゴロは一瞬立ち止まって、大叔母が声高に読み上げる長い口上をふさぎこんで聞き、すっかりのみこみ顔になる。ある種の威厳を失わない素直さで、台本の示すとおりに身をこなしながら。ついで彼は初めと同じように馬を駆って遠ざかる。そして何ものもその悠々たる騎行をとめるわけにはいかない。

しかし、予感、期待、再確認の行為が持ち得るエネルギーを、反復の中でも疑いも訂正もしない子供のように画面を追っていきながら、子供である話者は同時に醒めていく。

幻燈を動かすと、ゴロの馬はカーテンの上を、そのひだのところでふくれ上がりたり、またその窪みに駆け下りたりしながら、どんどん歩みつづけるのである。

上記の文には、ドラマの進行に加担しながら全体的に飲み込まれようと身構える少年がいる一方で、状況の全体を見て目覚める少年がいることになる。そして、この文に続くのは、光の流れの妙と同時にそこに裂けて見える露わな地を語る少年である。

ゴロ自身のからだも、乗っている馬のからだと同じような超自然的な性質をおびていて、途中で横たわるあらゆる物的障害、あらゆる邪魔者を、かたっぱしから平らげ、それを自分の骨や内臓にしてしまう、たとえそれがドアの把手であろうと、ただちにそれに乗り移って、彼の赤い服や蒼白の顔をくっきり浮かび上がらせるのだが、いつも同じように高貴な、同じように憂鬱なその顔は、そうした骨格の整形にも、少しも苦痛の色を見せなかった。

このように、この幻燈についての叙述は、物語に酔うことと醒めることを交互に教えて進む。それは、酔う主人公と、醒めた話者の関係ともいえる。ドラマに遊ぶ心とは距離を見失う心でもあるが、遊んだことを知る心は、距離を知らなければならない。

幻燈に対しては、ひたすら視覚に始めてこの距離を消そうとした主人公ではあるが、それでもこの人物は、幻燈の映写の物理的な歪みを知っていることで、それに対して醒めている話者とも重なりあっている。次に見るレオニー叔母の部屋では、匂いが動くものの因子となっているのだが、そこでは、その匂いに酔いしれる主人公の姿を見ることができだろう。

2) レオニー叔母の部屋

コンブレは住むには少々寂しかった。というのは、家々がこの地方に出る黒ずんだ石でできていて、入り口の踏み段は外に突き出し、破風が載っているために家の前に影をおとす。そういった家々の並ぶコンブレの町々では、日が暮れかかるとすぐ「広間」のカーテンをあげねばならないほど暗くなったからだ。(p. 49)

その町にあって、室内は完結した王国だった。コンブレにおける部屋の描写が持つ魅惑は、そ

こに醸し出される完結した幸いの感覚なのだが、それは、部屋の閉鎖性、密封性と、それに由来する、部屋の構成要素間の緊密な相互連関の動きにある。この効果を最大限に持ちうるのは、柔軟な形で混りあえる気体、そして「匂い」といえるだろう。

レオニー叔母は夫の死後、

第一にはコンブレから、つぎにはコンブレの自分の家から、つぎには自分の部屋から、つぎには自分の寝床から、いっこうに離れようとはせず、悲しみやからだの衰弱や病気や固定した考えや信心などからくるはっきりしない状態で始終臥せりながら、めったに下へは「降りて」こなかった。(p. 50)

(...) tante Léonie qui, depuis la mort de son mari, mon oncle Octave, n'avait plus voulu quitter, d'abord Combray, puis à Combray sa maison, puis sa chambre, puis son lit et ne <descendait> plus, toujours couchée dans un état incertain de chagrin, de débilité physique, de maladie, d'idée fixe et de dévotion. (I, 49)

フランス語の原文では、この叔母が「下に降りてこなくなった」原因となった、「はっきりしない状態」をあらわす5つの名詞が文末に順に並ぶ。つまり、悲しみ、からだの衰弱、病気、固定した考え、信心である。それは、流れから固着、追いはられない気分から見定めた決心へと移り、そうして、その狭い空間を住む人そのものとしていったのだ。そしてこの空間に、この住人の「精神の粒子」とでも言うべきものが流れただよっているのを私達は見ることになる。

描かれるのは、レオニー叔母の全存在を語る「匂い」であるが、そこで列挙される匂いは精神的なものであると、はじめから断りがある。そのうえで、段階を踏むでもなく、匂いの表現に抽象性と具象性の均衡を考えるでもなく、渦巻くように、否定しようのない量において様々の匂いが語られていく。子供は、その具体的な在り方によって、高齢の人びとの生きる空間に魅惑されたのだと後年思い出すことがあったとしても、そこで彼らが呼吸したものは、実は、月日を経て貯えられ、精神と同化したうえで具体的に存在した物質で満ちた空間の質なのだという事が、ここで示される。

C'étaient de ces chambres de province qui – de même qu'en certains pays des parties entières de l'air ou de la mer sont illuminées ou parfumées par des myriades de protozoaires que nous ne voyons pas – nous enchantent des mille odeurs qu'y dégagent les vertus, la sagesse, les habitudes, toute une vie secrète, invisible, surabondante et morale que l'atmosphère y tient en suspension; (I, 49)

その部屋というのは、田舎によくある部屋の一つで、たとえば、ある地方で、大気や海が一面に、目に見えぬ無数の微生物のために光をおびたり、香ったりするのと同じように、数知れぬ匂いで、つまり徳や英知や習慣など、すなわち、あた

りに漂う隠微にして目に見えぬ、しかも溢れるような精神生活のいっさいから発散する数知れぬ匂いで、われわれを恍惚とさせるといった部屋であった。(p. 50)

ところが、たしかな「匂い」の存在の背後に、どうしても生活する人が見えてくる。

odeurs naturelles encore, certes, et couleur du temps comme celles de la campagne voisine, mais déjà casanières, humaines et renfermées,

ところで、そうした匂いは確かに自然の匂いであって、近くの田舎の匂いと同じく、いわば特有の景物なのだが、それはもう尻を落ち着け、人間らしくなり、こもっている匂いなのだ。

こうして、「匂い」と「生活人」が一つになり、それ自体では香ることもない不透明に淀みかけたと思うと、次に、年月によって濾過され抽出された、匂いの極みのエッセンスがつけ加わり、香りの次元が更に上げられることになる。

gelée exquise, industrielle et limpide de tous les fruits de l'année qui ont quitté le verger pour l'armoire ;

つまりそれらの匂いは、その年の全ての果実でつくられ、果樹園から戸棚へと移された、美味で上出来の、澄んだゼリーなのだ。

「澄んだゼリー」の言及と共に、生活する人は、途端に、精神そのものとなる。しかし、それからまた急激に、日々の安逸と気配りに、右往左往する姿となってしまふ。

saisonnieres, mais mobilières et domestiques, corrigeant le piquant de la gelée blanche par la douceur du pain chaud, oisives et ponctuelles comme une horloge de village, flâneuses et rangées, insoucieuses et prévoyantes,

季節とともに変わりはあるが、家具臭くていかにもその家らしい匂い。暖かいパンの柔らかさで、身を刺す霜をやわらげる匂い。村の大時計みたいに、何もしていないようで、けっして時刻を違えない匂い。ぶらぶらしているようで、締めまりのある匂い。無頓着なようで、先を見越している匂い、

しかし、叙述の終わりに向うとき、抽象的な総括と見えたものが、実は、最も直接的な「私」である「体温を持った皮膚」そのものだ、つまり、これらの「匂い」はすべてが、やはり「匂い」だったということが納得されるのだ。

lingères, matinales, dévotes, heureuses d'une paix qui n'apporte qu'un sur-

croit d'anxiété et d'un prosaïsme qui sert de grand réservoir de poésie à celui qui les traverse sans y avoir vécu.

肌着類の匂い、朝ごとの匂い、信心家らしい匂い。ただ不安を暮らすばかりの安穩と、こうした安穩な生活の経験もなくたださっと横切るだけのものになら、詩情豊かな泉となるあの没風流とを、楽しんでいる匂いである。

こうして、濃密でいながらそっけなく自然に、田舎に生活する一老婦人の心の状態が、「匂い」によって示される。odeurの単語は、一つの名詞として文章を構成しうる範囲をこえて田舎町の空間を満たす。それは、修飾をうけた名詞「匂い」が、それによって指示された生命を与えられた主体となり、自己の分身が拡散している様を説明すべき方法を持たない居住者にかわって、その人の体内に発した日常存在の集積そのものを描きつつ、自己をも表現したと言える。

この叔母が、こうして生活の全てを営むようになった二部屋には、丹精をこめるあまりに狭く硬直していく乾きを感じられる。レオニー叔母にとって、生活は、常に変わることなく、彼女が様子ぶった軽蔑と深い愛情をこめて「日常茶飯事」と呼ぶところのもの、おだやかな千篇一律のうちに過ぎていくのだった¹⁶⁾。高齢に達した人たちが、等閑に付すことが出来なくなり、機械的な執着をもって和みを覚えつつ身につけた幾つかの特定の質を、子供達は、その落ち着きゆえに愛する。それゆえ、子供としての活力を持つ時代には、自身が荒々しい闖入者であることを知らずに、そこで夢中になって飽和される。手をゆるめれば、もう、飛び散ってしまうしかないような脆い静安は、子供の声に乱されながら、その過ぎ去った長い月日の感触を再び確認するしかない。「生活」は、誤解によって、しかし大きな肯定で伝えられていく。まるで賑わいの周辺での参加が集結して成る祭りのように、そこで少年は、この叔母の領分を浸すことで、「世界」を実感することになる。

つまり、その日の気分に応じた微妙な変化を付けて、話者を自室に迎えようとするレオニー叔母に対して、こんどは話者がその愛情を表すには、ここに醸し出されている空気の密度に添えて、自身がこの場の饗宴に参加することだろう。夕暮の寂寥感の中で映し出された幻燈の光の中に、話者は身を投じてもよかったのかもしれない。しかしそうはしなかった話者は、ここでは、身を投じればその濃密さで受け止めてもくれる「匂い」の物語に入っていく。

叔母の部屋の空気ははなはだ栄養分に富んだ、微妙このうえない静けさに飽満していたので、私はいつでも一種旺盛な食欲を感じながら近づいたものだが、復活祭の週間のまだ肌寒い初めの毎朝はとりわけそうだった。なぜなら私はコンブレに着いたばかりなので、この空気の味がいっそうよくわかったから。叔母においては言いにはいる前に、私はつぎの部屋でちょっと待たされる。この部屋にはまだ冬の陽射しが火の前に暖をとりに来ている。火はすでに二並びの煉瓦の間におこされていて、部屋中を煤の匂いで塗りこめているので、部屋にはまるで田舎の大きな「炉ばた」とか、お邸の煖炉棚といった趣がある。そしてこうした火のもとでは、ひとびとは隠遁生活の慰めに冬籠りの興をそえるために、戸外が雨や

雪になるばかりか、大洪水といった災難がおこることすら望むものだ。私は祈り台の方から、目のつまったビロード張りの肘掛椅子、頭の当たるところに毛糸で編んだ油揚げがいつも被せてある肘掛椅子の方へ4、5歩進んだ。火はパイを焼くときのような、いかにも食欲をそそる匂いを立て、この匂いのために部屋の空気はすっかり粒つぶができたようになっていた。そしてその匂いは朝の陽射しのしっとりした爽快さのためにすでに変質させられ、「醗酵」させられていたので、火はそうした匂いを、まるで捏粉を薄くして焼くようにし、それに卵黄を塗り、溝をつけ、ふくらまして、目には見えぬが手で触れる田舎菓子、たとえばすばらしく大きい《タルト》をつくっているようだった。この菓子のような匂いのなかで戸棚や食器棚や枝葉模様の壁紙の匂い、ずっとあっさりした微妙で上品な匂い、だがぐっとひからびた匂いをかぐと、すぐに私はいつでもあの花模様のある掛布団の匂い、いっこうははっきりしない匂い、ねちゃねちゃした、うま味のない不消化な匂い、青臭いオリーブ油のような匂いのする掛布団の匂いのなかへ、口には出せぬ強い欲望に駆られて、またしても捉えられてゆくのだった。

ここには、包みこまれて「中にあることの物語」に入っていく一例が示されている。それは、類似としての或る物語連関を見出し、そこにそれ独自の展開を期待しながらも、その物語性の発生自体に自らをできる限り近づけようと試みることである。ここで話者は、自らが指揮しつつ流される中で、「中にあること」の歓喜と抵抗感によって、自己消滅において自らを確認するまでの欲望を知るのだ。その渦の中に身を投じた話者によって、これらの「匂い」は質量を持って機能する存在物となり、両者は「匂いの物語」を育て持続させる。

私たちは、色彩と匂いによって「物語」の中に入っていく話者を見た。これに続いて、「物語」の展開を、文字どおり「茶碗」の中に見る二つの例を取り上げることになる。一つ目の例では、菩提樹の煎茶を入れた茶碗内に切り取られた自然の変容が現象する。二つ目の例では、マドレーヌ菓子の一片をいれてほとびさせた紅茶の碗から、コンブレ世界が現れ出るだろう。その叙述は、こんな風にしめくくられる。

(...) いまや、私たちの庭の花という花、スワン氏の園のすべての花、ヴィヴォンヌ川のすいれん、それに村の善良なひとたちも、彼らのささやかな住居も、教会堂も、全コンブレもその近郷も、こうしたすべてのものが、形をそなえ根を据えて、町も庭も、もろともに、私の茶碗から出てきたのだった。(p. 49)

引用で省略されている冒頭部の叙述をたどるのが、次に続く研究の課題となる。そこで私たちが見ていくのは、味覚に発した刺激に応じて、全感覚を動員して「物語」を読み取り味わおうとする話者の試みであるが、それは、受け身の感受から物語創作へ進もうとする「話者の背後にある作家」が、物語『失われた時を求めて』のごく冒頭においてあらかじめ示す、今後、築きあげていくべき大作への一つ意思表示ともなっている。

注

本小論は、以下の内容を持つ研究のⅢの1.の(1)を構成する。

マルセル・プルースト「失われた時」から「見出された時」へ

—『スワン家の方へ』に見る—

I 「コンブレ」に始まる

II Les chambres 全ての部屋を描く

III コンブレのイメージ世界

1. コンブレの町で

2. スワン家の方

3. ゲルマント家の方

IV スワンの恋

V 土地と名

なお、Iは、『神戸女学院大学論集』第35巻第2号に、IIは、同第35巻第3号に収められた。また以下において、Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, La Pleiade 1954の引用は、巻数(I, II, III)とページ数で示し、『失われた時を求めて』, 新潮社, 1974は単にページ数で示した。

- 1) スペイン語では、サンチャゴ・デ・コンポステラ。スペインの北西部にある大聖堂で、中世において、多くの巡礼者をひきつけた。フランスの各地からそこに至る主な巡礼路としては、(1)エクス・ラ・シャペル(ドイツ)、パリ、ボルドー、(2)ヴェズレー、リモージュ、バザス、(3)クレルモン・フェラン、モワサック、(4)アルル、サン・ジル、トゥールーズの各地の聖堂を巡って行く順路がある。イリエ、シャルトルを通る巡礼路とは(1)をさす。
- 2) オーギュスト・ロダン『フランスの大聖堂』, 東京創元社, 1984, p. 211。
- 3) 同上, p. 215, p. 211-2。
- 4) I, 184, I, 145
- 5) I, 184
- 6) I, 112
- 7) p. 159, I, 134 ジルベルト・スワンに憧れる話者は、「スワン」という名を自分自身では思いきって発声できず、対話中にわざと間違ったり知らない振りをしては、父親によって訂正させてその口から Swann の音を聞くのだった。(Ce nom, devenu pour moi presque mythologique, de Swann (...) I, 144)「抽象的なアイデア」と同じく、人間に関わりなく流れるようなそれ自身で完結した神話といったものに対して、固有名詞の音は、瞬時の橋渡しをするようだ。一方で、同じく憧れの対象であるゲルマント(Guermantes)家の人々を思い浮かべる話者は、固有名詞の音の持つ色彩によって対象に近づこうとする。「(...)要するに常にメロヴィング王朝時代の神秘につつまれ、《antes(アント)》というシラブルから出るオレンジ色の光のなかに、夕焼けの時のように浸っている姿として思い描いたのである(I, 171)」。
- 8) I, 185 失望や誤りを招いたこと自体が、ここに派生する二つのテーマを示している。一つは、同様に、対象が喚起するイメージの隣接性にもとづく価値賦与としての idolâtrie であり、もう一つは「(...)どこの土地にも、その土地固有の何かがあるもの(I, 185)」であるゆえにこそ、何らかの手がかりによって思いを完結するに至ろうとする為の métaphore filée (メタファーの連鎖)の存立の可能性である。
- 9) I, 184
- 10) I, 186
- 11) I, 186
- 12) III, 693 コンブレに発する二つの道が合体する事実は、「否定の否定」による肯定として述べられる。((...) les deux côtés n'étaient pas aussi innconciliables que j'avais cru)「私が考えていたほど、互いに相入れないものではなかった。」確かに話者は次のようにも言う。「創造する信念が私のなかで涸れはてているためか、それとも現実が記憶のなかでしか形成されないためか、こんなに初めて眼にするような花は、私にとっては、真実の花ではないように思われる(I, 184)」。

しかし、そうだからこそ、未来時は発見と拡大の世界となり、そこから、話者が「もっとも激変に満ちもっとも挿話に富んだ」生活と呼ぶ「知性の生活 (la vie intellectuelle)」(I, 183) と「素材としての生活 (la vie matérielle)」がつながりうるといえる。

13) I, 38

14) I, 42 この朗読が話者に与える魅惑の出発点にある聞きなれない語 champi とは、「捨て子」を意味する古語である。champi の音の拡がりには、「よく理解のできない語」に始まって、「意味を探ることが禁じられているような語」、「その意味するところの全てを見てしまいたくはない語」、「おおよそのものとして提示する理解に心がうまく添うのかと戸惑う語」としての不定性がある。

15) 中世の黄金伝説のヒロイン。前出のゴロは、その夫の執事。

16) I, 109

(原稿受理 1989年 4月21日)